

第15回島根新生児研究会

日 時：平成23年1月30日 (日) 午前9時30分より

会 場：島根県立中央病院 2階 大会議室
出雲市姫原4丁目1-1 TEL 0853-22-5111

当 番：瀬島 斉 (松江赤十字病院小児科)
世話人

1. 救急車による遠距離搬送の1事例

島根県立中央病院新生児集中治療室看護科

長島かおり, 遠藤 智弘

当院 NICU が今までに経験した遠距離搬送は心疾患手術目的での岡山大学病院が最長であった。今回、在宅ケアへの移行を目的として、居住地である中部地方の病院まで救急車による遠距離搬送を実施した。患児は人工呼吸器離脱後に島根県内にある母の実家近くの病院へ転院したが、呼吸不全となり再入院となった。母親は患児の入院中は実家で兄と暮らし、父親は居住地である中部地方で単身赴任の状況であり、家族は在宅ケアを希望され遠距離搬送を行うこととなった。医療スタッフは安全に搬送することを最優先とし、搬送中の患児の急変も含めて協議を重ねた。今回の遠距離搬送の準備に関しては、事務局、地域連携科、臨床工学科など様々な部署との連携が重要と考え、情報共有や役割分担を行い、患児の負担を最小限にすることを念頭にシミュレーションも重ね、できるだけ日常のケアパターンを変えないよう調整した。

2. 入院中より児童相談所の介入を必要とした事例

益田赤十字病院 4階東病棟

永井 優子, 岡崎 祥子, 斉藤 操
村上 雅美

はじめに：今回、家庭環境に問題があり、入院中より児童相談所 (児相) の介入や、地域との関わりを開始した事例があった。そこで、周産期における地域連携のあり方とその重要性について学んだので報告する。

事例紹介：女児 (Mちゃんと呼ぶ) は、在胎33週4日に常位胎盤早期剥離にて緊急帝王切開で出生する。出生児アプガースコア 2点 (5分後4点)、出生体重 1442g、日齢52で退院となる。【地域連携の実際】1回目の話し合い (日齢21)；地域との話し合いの中で、児相よりMちゃんの複雑な家庭環境 (両親の育児能力の不足、兄姉への暴力・暴言、経済的な問題) について情報提供があっ

た。今後も医療者側は引き続き愛着形成を育むための援助を行い、退院前に再度話し合いの場を持つことにした。2回目の話し合い (日齢46)；看護師より母子の愛着形成や母との会話から得られた家庭の様子について情報提供を行う。そして、退院後は地域の関係機関が連携し、「たくさんの目でMちゃんの成長を見守っていこう」と話しあった。

結論：1. 家庭環境に問題があり、かつ早産、低出生体重児といった虐待ハイリスクな状況において、医療機関と地域が連携し退院後の虐待予防を行っていく必要がある。2. 妊娠中から地域連携システムの円滑な活用が望ましい。

3. 音の視覚化による NICU 医療スタッフの騒音への意識の変化

松江赤十字病院 NICU

山本 麻由, 松島 亜樹, 白根 理果
門城すみ子

当院 NICU では、アメリカ小児科学会が勧告している騒音レベルを目標にし、擬似体験などを通じて減音対策に取り組んできた。今回は、音の視覚表示により医療スタッフの音に対する意識がどう変化するのかを検討する目的で研究を行った。方法として、意識的に出す最大・最小の音の測定後、発生音の測定結果と目標値のパネル掲示、および、電子カルテ・スクリーンセイバーで目標値とメッセージ、前日の最高値表示を継続し、4週間後にスタッフへのアンケート調査を行った。その結果、全ての医療スタッフが減音を意識するようになったと回答し、実際に減音できたと回答した人数は22名中16名 (72.7%) だった。また、22名中13名 (59.0%) が、パネル掲示よりスクリーンセイバーでの表示が、よりインパクトがあったと回答した。音の視覚表示による注意喚起で、NICU 内の不要な雑音を意識的に軽減できる可能性がある。また、音の軽減を促す視覚表示方法として、

電子カルテ・スクリーンセイバーの活用が有効と思われる。

4. 小児病棟における「癒し」の環境

島根県立中央病院小児病棟看護科

打田絵里世, 飯塚 文子

島根県立中央病院小児病棟では、検査や点滴、治療など苦痛を伴う処置を行う際に恐怖心やストレスを生じる子ども達に対し、苦痛やストレスを軽減し、治療や検査、処置がスムーズに受けられるように関わっている。実際に子ども達を癒す行為として、毎月お楽しみ会を企画・開催したり、プレパレーションを行ったり、病棟内の飾り付けを行っている。ウェルカムボードの掲示はスタッフの顔や名前が分かる事で安心感につながり、治療を進めていく上でのパートナーシップの形成に役立つ。また、子ども達の好きなキャラクターは子どもの興味を引き付け、苦痛を伴う処置での恐怖感を軽減させる。病棟内を飾りつけ、環境に配慮しながら看護を提供したり、プレパレーションを行うなどの癒しの活動を行うことで、病棟内が明るく楽しい雰囲気となり、恐怖心やストレスが軽減される。子どもだけでなく付き添いの家族にとっても落ち着く環境となる。

5. 小脳テント下に硬膜下膿瘍を形成したGBSによる早発型敗血症の1症例

島根大学医学部 小児科

美根 潤, 高野 勉, 山口 清次

公立雲南総合病院 小児科

高橋 知男

在胎39週5日、体重2780g、アプガースコア9/10(1分/5分)で出生した男児。出生前の母体のGBS検査は陰性であった。生後7時間で新生児一過性多呼吸として当院へ搬送された。一旦呼吸状態は改善したが、日齢1に皮膚色不良となり、白血球減少、CRP上昇、髄液細胞数の増多を認めた。髄液迅速検査でGBS陽性であり早発型敗血症・髄膜炎としてABPC+CTXで加療開始した。当初髄液細胞数やCRPは順調に低下していたが、日齢7以降再び増悪し、抗生剤を変更したが改善しなかった。日齢11の頭部造影MRI検査で小脳テント下に硬膜下膿瘍の形成を認めた。CTXを400mg/kg/日へ増量後徐々に髄液細胞数、CRPは改善し、MRI上も膿瘍の縮小を認めた。

今回の起因菌はABPC、CTXのいずれにも感受性を示していたが、1週間で効果が限定的となった。敗血症の治療中、感受性のある抗生剤を使用しながら改善に乏

しい場合、菌交代と共に膿瘍形成にも十分な注意が必要である。

6. 抗SS-A/Ro抗体の関与が示唆された新生児血小板減少症の1例

益田赤十字病院小児科

中島 香苗, 吾郷 真子*, 三原 綾

樋口 強, 三浦 勤

(*現大田市立病院 小児科)

症例は35週2日、2500gで出生した女児。生直後に血小板数2.7万と血小板減少症を認めた。母体は1経産、基礎疾患なし、妊娠高血圧症候群と切迫早産のため入院管理を受けた。女児のPAIgGは72ng/107cellsと高値で、母体からの移行抗体による血小板減少が示唆された。新生児同種免疫性血小板減少症を否定、児と母体の抗SS-A/Ro抗体はそれぞれ42.1U/ML、77.8U/MLと高値であり、抗SS-A/Ro抗体の関与が考えられた。児に肝脾腫、レイノー現象様症状を認め、新生児ループスと診断した。新生児に血小板減少をみた場合、抗SS-A/Ro抗体の検索も必要であると思われた。

7. 当院で出生した新生児の体重減少率と高Na血症、低血糖及び母乳保育状況について

吉野産婦人科医院

吉野 和男, 小田 美江, 金山由香理

金築 晴栄, 河瀬しのぶ, 青山 恵里

古居 幸代, 原 百子

目的：当院で出生した新生児の体重減少率と高Na血症、低血糖及び母乳保育状況について検討する。方法：平成22年1月から平成22年11月までに当院で出生し、体重減少率-10%以上の新生児30例について高Na血症、低血糖及び母乳保育状況を調べた。結果：30例の出生時体重は2610g~3780g(平均3123.1g)であり、最低体重は出生後3.4日で、体重減少率は-10.0~-12.1%であった。血清Naは139~152mEq/l(平均145.9mEq/l)であり、150mEq/l以上は5例(16.7%)であった。血糖は36~72mg/dl(平均54.2mg/dl)であり、40mg/dl未満は3例(10.0%)であった。出生後5日目に母乳のみは24例(80.0%)、体重は出生時より-8.5%(減少)、出生後2週目に母乳のみは24例(80.0%)、体重は出生時より0.8%(増加)、出生後1か月目に母乳のみは24例(80.0%)、体重は出生時より23.7%(増加)であった。全例、高Na血症及び低血糖による神経症状の出現はなかった。考察：新生児の体重減少率が10%以上は補足を考慮する徴候とされている。今回、高Na血

症及び低血糖について検討したが、異常値の頻度は低く、神経症状の出現もなく、10%以上の減少率だけで補足をする必要はないと思われた。また、出生後1か月目の体重の増加率は23.7%でやや低い値であったが、出生後の最低体重からは39.1%の増加であり、問題ないと思われた。

8. 高ビリルビン血症のリスク因子の検討 (第2報)

島根県立中央病院母性病棟看護科

三宅あゆみ, 嘉藤 恵, 杉原 恭子
落合 永美

島根県立大学短期大学部出雲キャンパス助産学専攻科
濱村美和子

島根県立中央病院新生児科
加藤 文英

正期産域に出生体重 2300 g 以上で出生し、出生後より母子同室を行っていた新生児が、高ビリルビン血症で NICU に入院した割合は2005年3.5%、2007年5.5%、2009年7.2%と年々増加している。昨年、高ビリルビン

血症のリスク因子を明らかにするため、2008年12月から2009年7月に分娩し、高ビリルビン血症で NICU へ入院となった15組の母児と、同時期に分娩をした73組の母児を対象に比較した。いくつかのリスク因子の有意性を示したが、今回その妥当性を検証するため、再度調査を行った。2010年4月から2010年9月に分娩をし、ビリルビン上昇を認めた34組の母児 (黄疸上昇群) と、同時期に分娩をした246組の母児 (対照群) を比較した。統計学的分析は SPSS 18.0 J for Windows を使用し、t 検定、²検定等を行い高ビリルビン血症のリスク因子の検討を行った。結果として、黄疸上昇群で母が初産婦、分娩所要時間が長い、アプガースコアが高値の児が有意に多かった。また、産後1~3日目の哺乳回数が少ない児が有意に多かった。

【特別講演】

「新生児～乳幼児神経疾患の診断と治療」

順天堂大学医学部附属練馬病院小児科教授

新島 新一 先生